

## 報告④

# ヤマト王権と九州の古墳文化

報告者紹介

和田 晴吾（わだ せいご）

京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科後期課程中退、京都大学助手、富山大学人文学部助教授、立命館大学文学部助教授・教授を歴任。現在、立命館大学名誉教授。兵庫県立考古博物館館長。博士（文学）

主な著書論文には、『古墳時代の王権と集団関係』、『古墳時代の生産と流通』、『古墳時代の葬制と他界観』、『前方後円墳とは何か』、『前方後円墳』（古代史をひらく）等多数。専門は日本考古学。

# ヤマト王権と九州の古墳文化

兵庫県立考古博物館館長 和田 晴吾

## 一 古墳とは何か

古墳とは何かという疑問から入っていきたいと思います。最初に結論から言いますと、当時の人々は古墳は墓であるとともに、亡き首長の冥福を祈る葬式の重要な舞台装置の一つで、その表面には葺石や埴輪で他界（あの世）が表現されていると考えていたと思います。当時の人々は人が死ぬと、その魂は鳥に先導された船に乗って他界へ赴いて末長く安寧に暮らすというように考えていました。日本で出土した遺物の中で一番その考え方を端的に表しているのが、図1の装飾付須恵器で、大分県の国東半島にあります一ノ瀬2号墳



図1 大分県国東市一ノ瀬  
2号墳 装飾付須恵器

から出土したものです。左右の下の方に人が乗った船が表現されていて、中ほどに船を先導する鳥があります。口縁部のところには、龍が表現されています。

図2にありますように、当



図2 古墳時代 葬列復元図 (早川和子 絵)

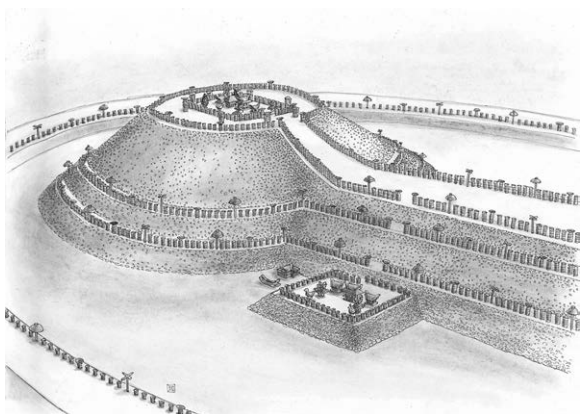


図3 前方後円墳完成時の推測図 (中期前葉)  
(早川和子 絵)

時の人々は、お葬式の葬列で、死者の魂が他界へ行く様子を真似て、遺体を赤く塗った飾られた船に乗せて、古墳へと引っ張っていったわけです。イラストレーター早川和子さんに描いていただきました。その古墳の表面には図3のように葺石や埴輪で他界が表現されていたのです。現在は木で覆われておりますけれども、古墳ができたばかりの時はこんなものだったのです。ここに「造出（つくりだし）」と

いうのがありますが、その近くに船が見えます。これはちゃんと死者の船が他界へ到着したことの証として舟形埴輪が置かれていたということです。

## 二 古墳の秩序

当時は、古墳は力があれば誰でも自由に造れたというわけではありません。多くの古墳はヤマト王権が直接、間接、その築造をコントロールしておりました。

そうして、被葬者の政治的地位に応じて古

墳の形と規模が決められたわけであります。従いまして、古墳には大王を頂点とした階層的な政治秩序が表現されることになったわけです。さらに古墳の表面に他界が表現されているということになりましたら、この現世の古墳の秩序は他界にまで及び、古墳はこの世とあの世、両方を秩序付ける巧妙な装置として機能したものと思われまふ。

### 三 大王墳と地域の古墳の動向

ところが、この古墳の秩序の頂点に位置します大王の古墳を大王墳と呼ばせていただきますが、その墓域は図4のように時期によって変わっていきました。最初は奈良盆地の東南部にありますオオヤマト古墳群にございました。それが次の段階（前期後葉）には奈良

[illegible]

図4 奈良県・大阪府主要古墳編年図



(橿原市) が造られます。

図5をご覧くださいますと、ここが最初の大王墳である桜井市箸墓古墳を含むオオヤマト古墳群。前期の後半になりましたら、これが佐紀古墳群の西群。中期になりましたら、ここが古市古墳群、ここが百舌鳥古墳群になります。多分、大王墳は百舌鳥と古市の間を行ったり来たりするような形だったかと思います。これは畿内地域の地図でありますけれども、大阪のところは河内潟が入っております、ここに流れ込んでい

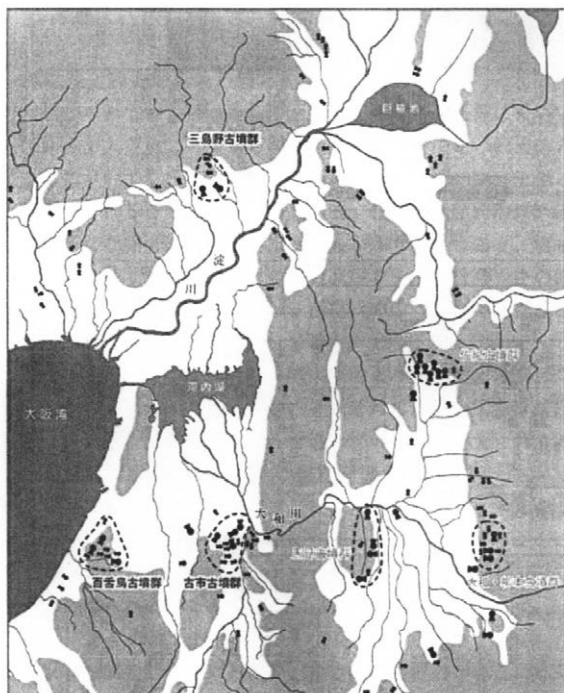


図5 畿内地域古墳分布図

盆地北部の佐紀盾列(たたなみ)古墳群の西群に移っていきます。そして古墳時代の中期になりましたら、大阪平野南部の百舌鳥・古市古墳群へと移ってまいります。ところが、百舌鳥・古市も中期末、後期初頭には急速に衰退します。そして、六世紀の前葉(後期中葉)になりましたら、大王墳は大阪府高槻市の今城塚古墳という古墳に移ります。そして、後期後葉には飛鳥地域の入口ぐらいに奈良県最大の前方後円墳である見瀬丸山古墳

るこの川が大和川であります。私はこの大和川の中流にあります奈良盆地の地域と、大和川の下流の河内地域は最初から一体的なもので、ヤマト王権は両地域を基盤として成立していたというふうに考えております。

東アジアの朝鮮半島の国々を見ましても高句麗にしましても百済にしましても新羅にしましても、いずれも比較的大きな川の中流に都があつて、入り口に外港つていうか外向きの所がある。こちらが経済的基盤の中心でありまして、中流域が政治の中心というような形で一貫して展開しているのではないかと思います。

だから、ここが磯城・磐余（しき・いわれ）になりますが、そういった地域を中心に王宮があり、大王墳を造る場所がどんどん変わっていくということになります。それでは、どうして変わったかと言いましたら、時期ごとの政策によりまして、大王墳の立地する場所が変わつていったということであります。従いまして、その大王墳の墓域が変わることが各地域の古墳の築造に、非常に大きな影響を与えることになりました。例えば、王権が領域の拡充をめざした前期後葉に墓城を移した奈良盆地の北部でしたら、これが木津川ですけれども、東に行けば東国へ行きます。これを下つて行きますと、巨椋池というのがあつて、これをのぼりましたら宇治川で、その先は琵琶湖になりまして、これも、東山道から北陸に行きますし、これは桂川ですが、これを越えて行きましたら日本海側へ行きます。こちらへ淀川を下れば瀬戸内海、それから九州を通じて西方に広がっていきます。言ってみましたら、王権内の全域に一番開かれた場所、奈良盆地の出口といったところになるわけで、ここに大王墳が造られています。

中期になりましたら、非常に東アジアとの交流が活発になりますので、こちらが百舌鳥古墳群でこつちが

古市古墳群でありますけれども、いずれも東アジアに開かれた畿内の出入口に古墳群が造られています。これは、対外政策を重視するような段階になってのことなのではないかと思えます。瀬戸内海から直接百舌鳥古墳群が見えるのではとよく言いますけれども、大阪湾を突っ切ってこないと百舌鳥には行きません。沿岸沿いで来るのが本来のルートだと考えられます。

ところで古墳時代前期や中期には、各地で地元を支配する首長たちが大王を中心に政治的にまとまっていた時代でありまして、その体制を私は首長連合体制と呼んでおります。前期の後葉はその発展期で、先ほど触れましたように、王権は領域の拡充をめざし対内重視の政策をとっていましたので、各地から多くの首長がこの連合に入ってきて、前方後円墳を造るようになります。図6は、

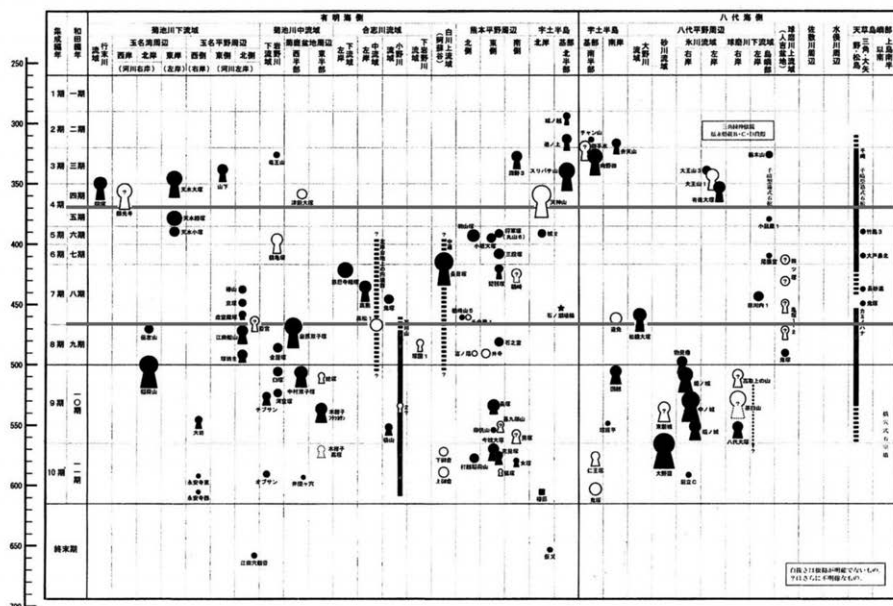


図6 熊本県主要古墳編年図

熊本大学の杉井健さんが作られた熊本県の主要な古墳の編年図ですが、こちらでも前期後半を中心に前方後円墳が造られます。ところが中期に入るとあまりありません。前方後円墳の築造には強い規制がかかり、限られた古墳だけが前方後円墳として造られたわけです。ここに大きい前方後円墳（阿蘇市長目塚古墳）がありますけれども、これは阿蘇谷のものでありますので、これを除きましたら余計にわかりやすいかと思いますが。この岩原双子塚は、もう少し古くなるかもしれませんが。けれども、そういうような状態です。ちなみに、先程吉村先生がおっしゃいました江田船山古墳は、後期の最初の古墳になります。

図7は古市古墳群や百舌鳥古墳群あるいは一定の地域の古墳・古墳群の、同じ時期のいろんな形と規模の古墳の関係を模式図にしたものですが、全体としてはこういうような格好になります。大王墳を頂点とした、ごく一部の限られた数の首長たちだけが前方後円墳を造れまして、他の数多くの中小

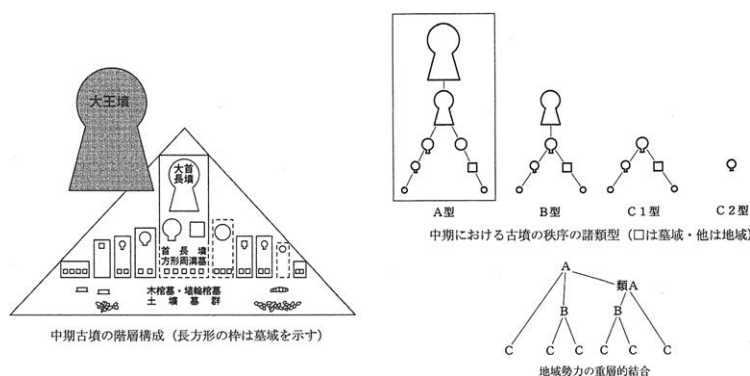


図7 中期古墳の秩序・階層模式図

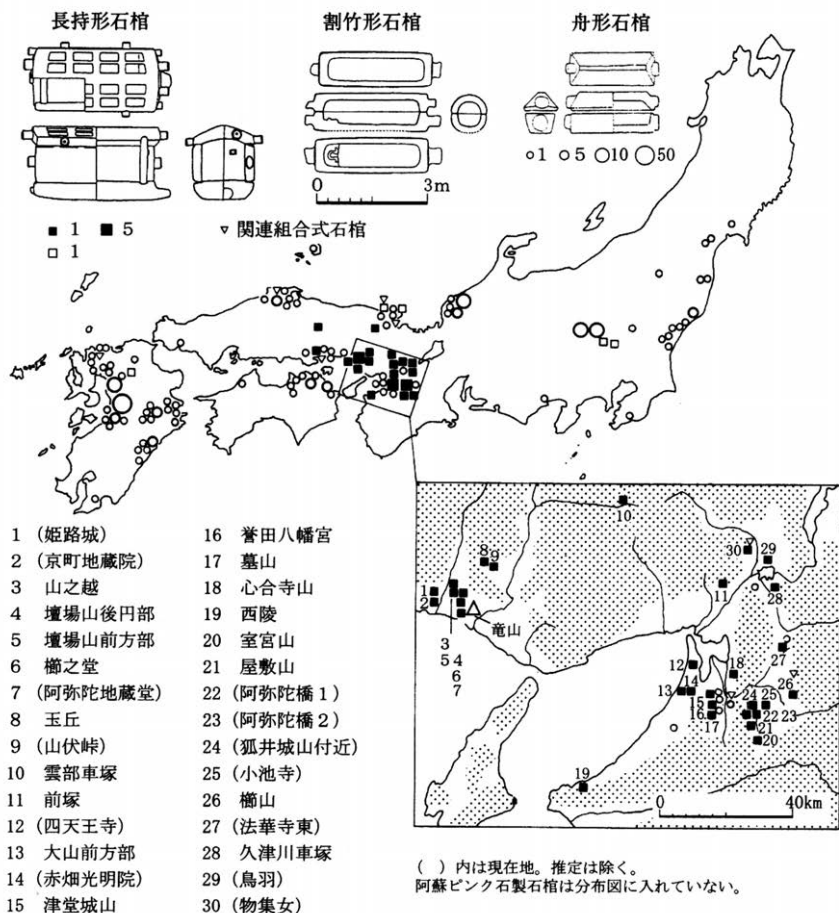


図8 長持形石棺と割竹形・舟形石棺の分布図

首長たちはだいたい  
 円墳とか帆立貝墳と  
 か方墳を造ること  
 になります。そう  
 いうような支配の  
 体制が古墳時代  
 中期に出現する  
 と思われま  
 す。

この前期から中  
 期にかけての頃、  
 九州、特に有明海  
 沿岸地方の勢力が  
 だんだん台頭して  
 きます。それはこ  
 の地域の古墳文化  
 の独自性が顕著に  
 なってくるとい  
 うことでありま  
 す。

前期後葉に有明海沿岸で舟形石棺が作りだされます。図8を見ますと、畿内を中心とした限られた地域では組合式の長持形石棺が分布していますが、九州を中心とした地域では刳拔式（くりぬきしき）の舟形石棺が作られました。この図には六世紀のものまで入っていますので、ちょっと分かりにくいと思いますが、この長持形石棺を作るグループと舟形石棺を作るグループと、そしてどちらも使わないグループと。この3つの地域が古墳時代中期（だいたい五世紀）に現れるわけですけれども、それはその後の歴史過程にかなり大きな影響を与えたと思います。今日いらっしやっているかと思いますが、宇土市教育委員会におられた高木恭二さんはこういう舟形石棺の専門家です、今度もその研究成果を利用して頂いております。

また、図9の1のように中期の初めから、横穴式石室の採用が始まります。これは福岡県の鋤崎古墳の石室の図でありますけれども、これは日本で一番古い横穴式石室の一つになります。この当時は近畿地域も含めて竪穴式石槨とか粘土槨といった埋葬施設が使われていたわけですが、そういったところよりも一〇〇年ほど古く、九州では横穴式石室が採用されだします。図9の5の古墳の特徴も、遺体を置く床（屍床、ししゅう）はあるわけですが、棺桶は使わない。図9の3は古墳時代中期中葉の肥後型横穴式石室と呼ばれているタイプのものでありまして、玄室の床面の周囲に板石を立てて囲みまして、これを石障といいますが、内部を板石で区画して遺体を三体置けるような形のものも現れます。あるいは図9の4のように、狭い横穴式石室の中に大きな石棺を置きまして、短辺に出入りできる横口が開いているようなもので、妻入横口式家形石棺と呼んでいるようなものもあります。これは福岡県の石人山古墳のものでありますが、こういったもの



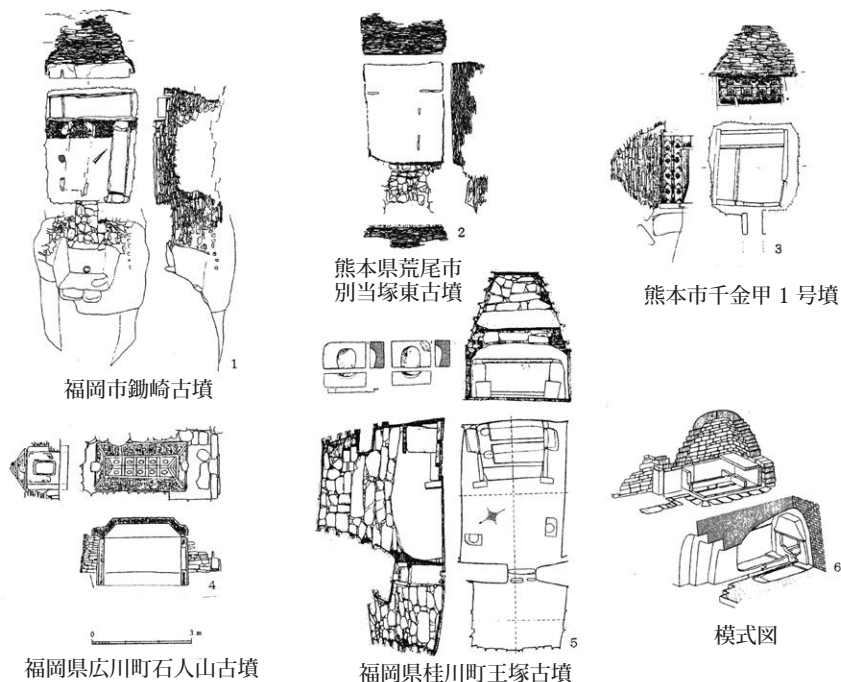


図9 九州的横穴式石室

も有明海沿岸でのみ発達した、一つの特徴になっています。

皆さんもよくご存知かと思いますが、図10は、九州で石人石馬と昔から呼ばれてきたものです。先ほどまでは、古墳内部の埋葬施設に非常に地域色が強く表れた例ですけれども、墳丘外面の埴輪といっしょに阿蘇溶結凝灰岩で作ったものを立てています。最初はこのいう短甲（たんこう）に草摺（くさずり）をつけたような形から始まり、広がります。後期のものかと思いますが、南の方に行ったら、先ほど亀田さんの話で器財的なものが多いとか言われたところに当たりますが、どっちかというと南の方はですね、埴輪というより、木の埴輪を真似たようなも



のが作られているような感じがしますけど、こういうものがあります。

いずれもこういうのはほかの地域にはない非常に地域色の強いものであり、そのいくつかは、この後で出現します彩色の壁画古墳とともに高句麗など、朝鮮半島の墓制との関係があるのではないかと思います。

#### 四 中期から後期へ（第一段階・首長連合体制の変革）

ところで、古墳時代の中期から後期への変化は古墳時代最大の変化でありまして、古墳時代を二分するほどのものです。私は先ほど言いました首長連合体制から中央集権的な国家体制へ本格的に移行して行く、そ

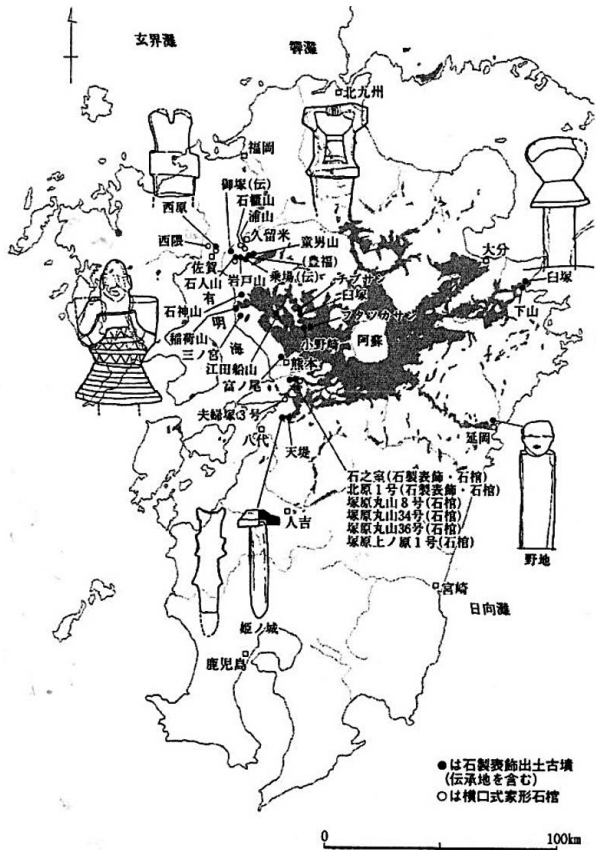


図 10 石製表職（石人石馬）と横口式家形石棺の分布図

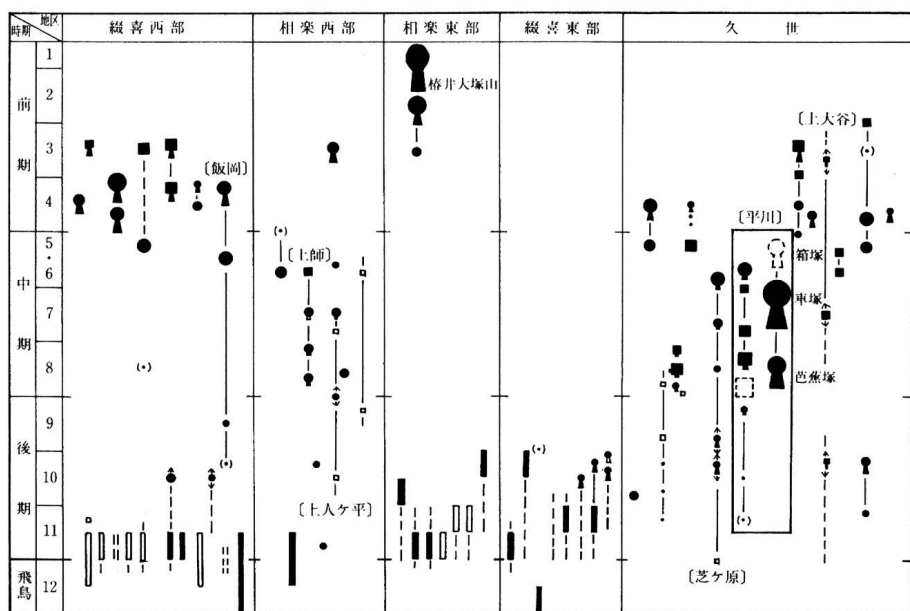


図 11 京都府南山城の主要古墳編年図

の最初がこの中期から後期への変化の中にあるのではと思っております。それは二つの段階を追って行われました(図15参照)。

その第一段階は五世紀後葉にあたる時期で、大王名の王朝名で言ったら、だいたい雄略朝に相当するぐらいの時期になるかと思えますけれども、その第一段階を説明するのには図11が一番分かりやすい。これは京都の南山城の、先程の木津川流域の古墳群の変化です。日本の古墳はブツ切れであるというのが一つの特徴です。前期の後葉ぐらいに前方後円墳を造る集団は木津川の西側にも東側にも五つから六つあったわけですが、中期になりましたらごく限られてまいりまして、特に前方後円墳を造る地域は久世地域しかないような状態になります。ところが、この9期以降が後期になるわけですから

も、途端に中期の大きな古墳群が一気に消滅してしまいます。多分、王権によって地元を支配していた首長たちの支配が解体され、旧勢力潰しが始まったのだらうと思っております。それに対して、少し遅れますが、新しい墓域に中小の前方後円墳を造る首長が現れるとか、それまで方形周溝墓を造っていた、いわゆる庶民的な階層の人たちが円墳を造りだすとか、変わっていく、そういう段階が出現します。その方形周溝墓から円墳に変わっていったものを古式群集墳と呼んでおりますけれども、王権が初めてそれまでは首長たちの支配下にあった民主層を、直接支配するような段階がやってきたのだらうと思います。

図12は熊本市の塚原古墳群でありますけれども、全体が一〇〇基を超えるほど発掘調査されました中に、中期的な方形周溝墓群がありますけれども、これが第一段階ぐらいに円墳群へと変わっていく、大きめの中小の首長墳と小さめの古式群集墳とから構成されているものと思われれます。

ところがこういった首長の古墳とか、その支配下にありました民衆の墓の変化が起こっている最中に、大王墳はどうだったのかと言いましたら、図4をご覧くださいましたら分かりますように、百舌鳥古墳群は中期で築造が終わります。これが大山古墳ですね。これが土師二サンザイ古墳で発掘調査の結果、全長三〇〇mであることが分かりました。そこで築造が終わります。古市古墳群では、これが岡ミサンザイ古墳という二〇〇mを超える古墳なのですけれども、この古墳でそういう大きな古墳の築造が終わって、後は大王墳と推定できるのは一二〇mぐらいの大きさの古墳がしばらく続くわけです。磐井の墓だと言われている岩戸山古墳が大体一四〇m前後ぐらいですが、周辺をみても同時期最大のものは、それと同じぐらいの大き

さのものになります。こういうような、王権が弱体化したと思えるような現象が起こるわけであります。だから、この時期の最初に目指された方針は、この王権の弱体化によって一度挫折するわけですが、その弱体化の一因は旧勢力の激しい抵抗にあったのではないかと考えております。

## 五 有明海沿岸勢力の台頭

では、その時期には九州はどうであったのかということになりますが、九州では一つは新しい要素として、ヤマト王権が目指そうとした方向性を向いた古墳がでてきます。それは先に言いました清原古墳群の江田船山古墳で、この古墳からは銀象嵌の鉄刀が出ておりまして、ワカタケルという名

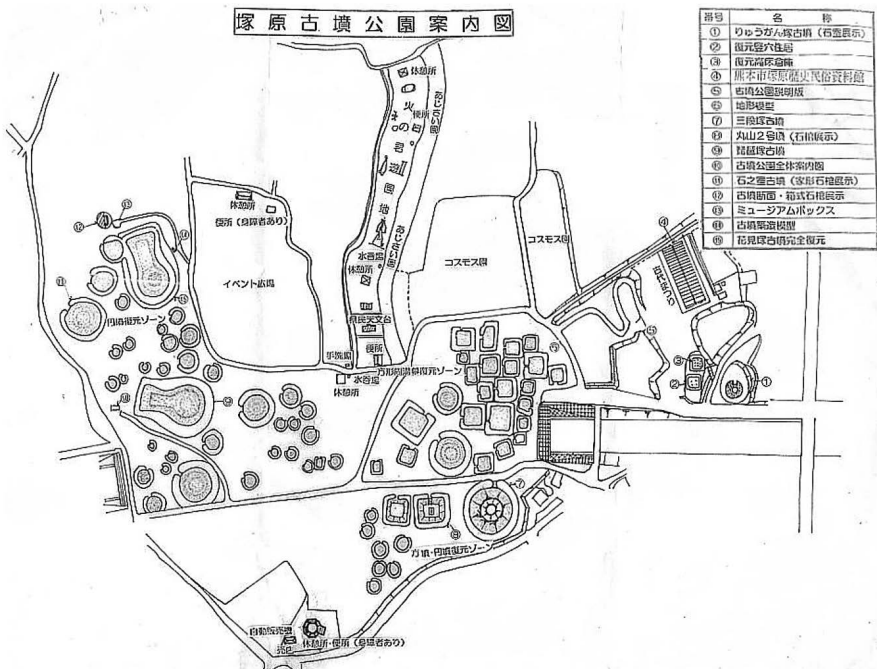


図 12 熊本市塚原古墳群分布図

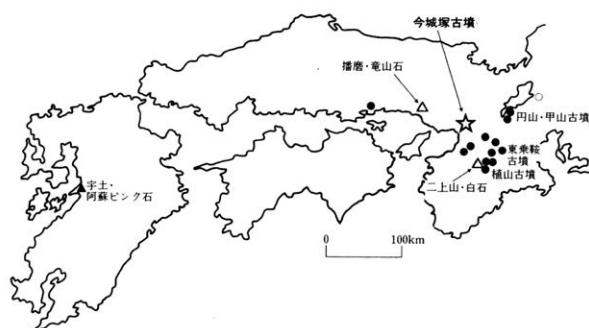
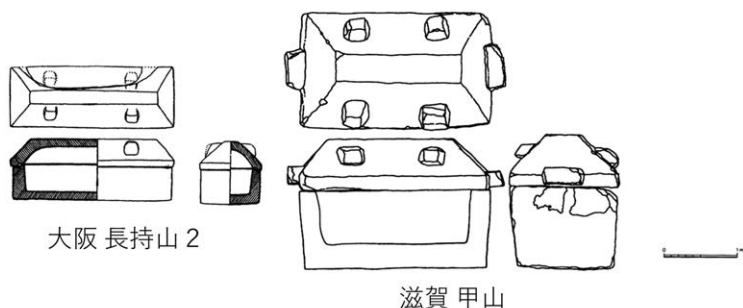


図 13 阿蘇ピンク石（馬門石）製家形石棺分布図

前が出てまいります。倭王武にあたるわけです。雄略大王にあたると思いますが、そこには「典曹人」（てんそうじん）という言葉があるのです。それに対するものとしては関東では埼玉稲荷山古墳の鉄剣銘があり、そこにはワカタケルという言葉とともに「杖刀人」（じょうとうじん）という言葉が出てきますので、先ほどの吉村先生の話の中で出てきました人制という非常に初源的な官僚の一つの制度かと思えますけれども、そういったものに関わるような古墳が現われます。関東でも埼玉稲荷山古墳が出てくる時期は、古墳築造の一つの大きな画期に当たります。

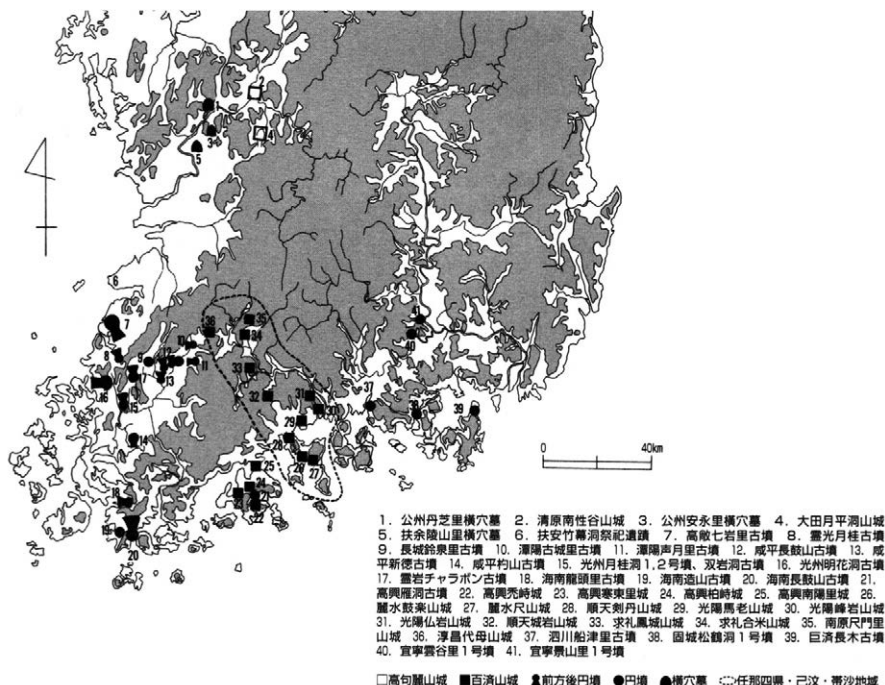


図14 朝鮮半島古墳・古代山城分布図

そういったものが出てくる一方、九州の方ではどういう現象が起こるかと言いましたら、一つは熊本県宇土市で採れます阿蘇ピンク石、地元では馬門石と呼ばれていますけれども、これはかつては奈良と大阪の境にある二上山で採れる石だと言っていたことがあるのですけれども、宇土市の高木恭二さんがいろいろ分析されまして、実は宇土市にその産地があつて、そこで採れた石を持ち運んだということで、覚えてらっしゃる方がいるかと思いますが、「大王の棺を運ぶ実験航海」ということで、大阪湾まで実際に石棺を運ばれたことがあるわけでありまして、そういったものが各地に広がっています(図13)。この石



棺は地元よりも畿内地域を中心とした家形石棺に合わせたような形のものがたくさん造られておりますが、九州の要素が東へ広がっていく一つの現象です。もう一つは、これ図14の朝鮮半島の南部で、特に西側に寄った地域でありますけれども、これは朴天秀（パクチョンス）さんが作られた図であります。朝鮮半島の前方後円墳がよくお聞きになったかと思いますが、九州系統の石室を持った前方後円墳が造られたということが話題になりました。けれども、実は、前方後円墳だけではなくて円墳や方墳もあるのだということが分かりまして、最近では方墳なんかを掘りましたら埴輪まで、しかも人物や動物の埴輪まで出てきたというような状況でありまして、こういったものもやはり、九州の有明海沿岸勢力、九州北部までを含む九州勢力の動きと非常に関係しているものだろうと思います。九州の横穴式石室は、当然のことながら、この頃には西日本の各地に広がりだしていました。

そういうことを経た上での五二七年、旧勢力最大の勢力でありました有明海沿岸勢力の最高首長だった「筑紫君磐井」の乱が起こるということでもあります。これは多分、中期的な旧勢力の最後で最大の抵抗にたつてではないかなと考えています。

## 六 中期から後期へ（第二段階・中央集権的国家体制の始まり）

その結果を受けまして、第二段階が古墳時代後期中葉の六世紀中葉頃に本格的に始まってくるわけです。時間がありませんので、詳細は図15にゆずりますが、一番下にありますように古市・百舌鳥古墳群で衰退し



## 中期から後期へ — 首長連合体制から中央集権的国家体制へ —

【第1段階・後期前葉】		【第2段階・後期中葉】
・ 中期の大型古墳群の消滅 （首長地元支配解体）	→	消滅
・ 新しい墓域に中小前方後円墳 （新勢力の台頭）	→	首長墳の円墳化 （首長の官人化）
・ 古式群集墳の出現 （王権の民衆の直接支配）	→	新式群集墳の盛行 （民衆の王民化進む）
(磐井の乱)		
・ 百舌鳥・古市古墳群の衰退 （王権の弱体化）	→	新しい墓域に大王墳 （今城塚古墳・継体）

図 15 古墳時代中期から後期への対応表

ていた大王墳が、大阪の淀川北岸の三島というところに、造られます。これが継体大王が埋葬されていると言われている今城塚古墳でありまして。面白いことにこの今城塚古墳は単独で造られておりまうけれども、発掘調査が行われまして三種類の石棺の石材が出てまいります。その一つが馬門石、阿蘇ピンク石の石材でした。継体大王は滋賀県の近江で生まれて越前で育ったといっておりますが、越前は先ほど見ていただきました舟形石棺の広がっていた頃から九州と非常に関係がありましたことなども含めて考えますと、継体大王擁立の背景には九州勢力が深く関わっていた可能性があるのではないかと思います。ただ、それは両者がうまくいった時は良かったのですが、継体大王が大王位について中央集権的な国家体制を目指す動き

を始めた途端に、磐井とは政治的な立場上で大きな齟齬（そご）が出てきて反乱に至ったのではないかと思っています。

## 七 有明海連合のその後

だからと言って有明海連合、この地域の古墳は大幅に力がなくなったというわけではありません。一つは皆さんよくご存じの山鹿市のチブサン古墳図16でありますけれども、こういう「平入横口式家形石棺」、またの名は「石屋形」と呼んでいるものでありまして、そこに彩色の壁画を施す。これは菊池川流域の古墳の塚坊主古墳から始まると言われています。それが筑紫の方へ広がっていきまして、図17は遠賀川流域の桂川町にあります王塚古墳ですが、日本で一番きらびやかなものと言われていますが、遺体を寝かせるりっぱな屍床付きの石屋形があって、全面に装飾が施されて



図16 熊本県山鹿市チブサン古墳

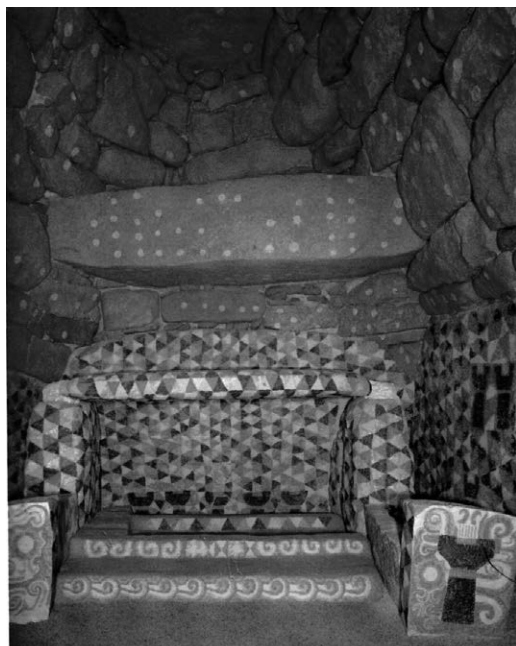


図 17 福岡県桂川町王塚古墳

います。こういうようなものは磐井の乱後の現象でありますので、まだまだ九州の特に肥後を中心とした地域の力は隠然たる力を持っていたと言えるかと思えますし、何よりも、この地域と関係のある石室とか横穴とか壁画とか、それらは関東地方の北部から、東北南部の方にまで影響を及ぼしています。ですから、鞠智城の評価を考える上でそういった地元勢力の動向を十分考える必要があるのではないかと思います。いつも、大陸と結ぶ力もありますので、そういうこともお話をさせていただきまして、これで話を終わらせていただきます。最後のところは資料編P 43をご参考ください。ご清聴どうもありがとうございました。

## 挿図引用文献

- 図 1 兵庫県立考古博物館 2019『埴輪の世界―埴輪から古墳を読み解く―』  
(写真提供・大分県立埋蔵文化財センター)
- 図 2・3 兵庫県立考古博物館 2019『埴輪の世界―埴輪から古墳を読み解く―』  
(原図・早川 和子)
- 図 4 天野 末喜 1993「大王墳の移動は何を物語るか」『新視点 日本の歴史』2、新人物往来社(一部変更)
- 図 5 杉井 健 2003「古墳時代の展開と終焉」『新宇土市史』通史編第 1 巻
- 図 6 杉井 健 2010「肥後における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』(『九州前方後円墳研究会』第 13 回)
- 図 7・8・11・13 和田 晴吾 2018『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館
- 図 9 和田 晴吾 2014『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館
- 図 10 柳沢 一男 1991「九州古墳文化の展開」『新版・古代の日本』第 3 巻、  
角川書店
- 図 12 塚原古墳公園案内図(看板より・塚原歴史民俗資料館)
- 図 14 朴 天秀 2007『加耶と倭―韓半島と日本列島の考古学―』講談社
- 図 15 和田作成
- 図 16・17 国立歴史民俗博物館 1993『装飾古墳の世界』

## 資料編

- 高木 恭二 2008「西九州古墳文化とその特質」『古代日本の異文化交流』  
勉誠出版
- 蔵富士 寛 2011「九州北部」『講座・日本の考古学』第 7 巻、青木書店
- 柳沢 一男 1991「九州古墳文化の展開」『新版・古代の日本』第 3 巻、  
角川書店
- 柳沢 一男 1995「岩戸山古墳と磐井の乱」『継体王朝の謎』河出書房新社
- 和田 晴吾 2014『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館
- 和田 晴吾 2018『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館